

東北 VALUE SIGHT 山形



東北まちづくりオフサイトミーティング 発起人・運営委員
後藤 好邦 (ごとう・よしくに)

1972年、山形市生まれ。
94年4月、山形市役所入庁。納税課、高齢福祉課、冬季国体室、企画調整課を経て、現在、都市政策課に在籍(2年目)。
2009年6月6日に、北上市職員の佐々木範久氏、高橋直子氏らと共に「東北まちづくりオフサイトミーティング」を発足。
現在は当ネットワークの運営委員を務める。
東北まちづくりオフサイトミーティング
〒990-2401 山形市平清水2-9-23-205
TEL 090-7331-6122 E-mail yoshi.g1972@gmail.com
<http://t-o-m.cafe.coocan.jp/>

何か新しいことを始めるときや困難に直面したときなどに、人と人とのつながりやネットワークの大切さを痛感することがある。「つながる」ことの重要性を感じて、若手行政職員が中心となって立ち上げた「東北まちづくりオフサイトミーティング」は、東北という広域的なフィールドでのまちづくりや人づくりを目指して活動を展開している。

東北まちづくりオフサイトミーティングとは

東北まちづくりオフサイトミーティング(以下、「東北OM」)は、東北管内でまちづくりや地域活性化に資する“人財”育成を目指し活動を行っている広域的なネットワークである。現在、東北6県を中心に380名ほどの会員が在籍しているが、その内訳をみると、行政職員や民間企業の社員、あるいはNPOや大学の関係者など、極めて多岐にわたっている。その点では、広域的であると共に、民と官の垣根を越えたネットワークともいえる。

東北OMの活動は大きく分けて2つに分けられる。第一に定期的な勉強会の開催である。平成21年6月6日に発足して以降、仙台市を中心に、山形市や酒田市、栗原市などを会場として10回ほど講演会やワークショップなどを開催してきた。講演会の講師には地域活性化の伝道師として有名な木村俊昭氏や斬新な政策で全国的にも有名な佐賀県武雄市の樋渡啓祐市長など、実に多彩な顔触れを招聘し、毎回、いろいろなテーマで学びの場を提供している。第二にITツールを活用した情報交換及び情報発信である。メーリングリスト(以下、「ML」)を用いた会員相互の情報交換は1カ月平均で投稿件数が100件を超えるほどになっている。またホームページやSNS、ニューズレターなどを用いた情報発信も積極的に行っている。

東北OM発足の経緯

東北OM発足の契機は平成21年2月にさかのぼる。当時、筆者は山形市役所で業務改善運動に携わっていた。この一連の活動のなかで、北上市の職員と交流していたが、この機会が両市の職員にとって大きなモチベーション向上の場になっていた。この状況

東北まちづくりオフサイトミーティング 東北6県をつなぐ民・官の領域を超えた 新たなネットワークづくり

から、交流すること、言い換えれば、つながることの重要性を感じるようになっていた。そこで、北上市の職員である佐々木範久氏、高橋直子氏と相談し、東北という大きなフィールドのなかで、地域や業種、年齢など、様々な垣根を超えて共に学び、活動するための新たなネットワークを構築しようとの発想に至る。これが東北OM発足の契機となった。

その後、この発起人3人を中心に、会員募集に向けた周知活動を行った。その結果、同年6月のキックオフミーティングまでに30名ほどの会員を集めることができたのである。

敷居は低く、されど志は高く

当ネットワークでは「敷居は低く、されど志は高く」というコンセプトを掲げている。このコンセプトには、誰でも気軽に参加できるような環境を整えつつも、活動の内容自体は高みを目指し、志を持って取り組んでいこうという想いが込められている。もしかすると、このようなコンセプトを掲げ活動してきたからこそ、2年余りの間に、会員数が10倍を超えるほどの大きなネットワークに成長できたのかもしれない。

このコンセプトのもと、東北OMでは楽しみながら意識や知識、モチベーションを高めるための活動を行っている。活動において重要なことは“楽しみながら”ということである。筆者は「楽しくない活動は長続きしない。また長続きしない活動は大きな成果を生み出すことはできない」と考えている。つ

まり、楽しみながら活動することにより、その活動は継続し、大きな成果を生み出すということである。この考えに基づき、東北OMでは29名のメンバーにより構成された運営委員会が中心となり、会員のみなさんに楽しく活動していただくための仕掛けづくりを日々行っている。

東日本大震災と東北OMの新たな役割

平成23年3月11日に発生した東日本大震災。地震、津波、そして原発問題と、われわれのふるさと東北に甚大な被害をもたらしたこの大震災は、東北OMの活動に変化をもたらす大きな転機となった。前述したように、従前、東北OMの活動は勉強会の開催やMLを用いた情報交換など、会員に情報収集の場を提供することに主眼を置いたものになっていた。言い換えれば、会員にインプットの場を提供することが主たる役割だったといえる。しかし、この大震災により、東北OMは動くネットワークに変化していったのである。

まず、MLが被災地支援を目的とした情報交換ツールとして大きな役割を果たすことになった。震災発生後、安否確認や避難所における支援物資の過不足状況など、さまざまな情報のやり取りが展開され、投稿件数が激増した。このMLによる情報交換により、実際、支援を必要としていた避難所に直接物資を届けることができた事例もあった。また、被災地で支援活動に従事している会員からはMLを通

して配信されるメールからたくさんの勇気と元氣をもらったとの声も届いている。

この他にも、復興祈念チャリティーイベントの開催やボランティアバスツアーの運行など、被災地支援に向け、東北OMとして直接的な活動を行うケースが増えてきた。また会員間の個人的なつながりによる活動も徐々に始まっている。このように今まで受動的だった会員活動が自らの意思で動く能動的な活動に変化している。今後、これらの活動の一つひとつが東北OMの成果になっていくと確信している。

東北を代表するネットワークを目指して

東北OMは発足してまだ2年あまりの経験浅いネットワークである。しかし、東北6県をつなぐ活動を実践している点で、その存在意義は大震災を機にますます大きくなっている。このような状況を踏まえ、今後、活動内容の充実や会員数の増加など、質、量共に一層の充実を図っていきたいと考えている。そして、将来的には、他の地方にも良い影響を与えられるような東北を代表するネットワークへと成長していくことを目指している。



東北OMのメンバー(第2回勉強会より)